

金丸邦三先生を偲ぶ

三 瀧 正 道

昨年、金丸先生が長い闘病生活ののち、幽明境を異にされた。長年、そのご厚恩に浴した者の一人として、痛恨の極み、その思いは到底言辞に尽くせないが、拙筆ながら断ちがたい先生への思いを書き記すことをお許し願いたい。

先生にはじめてお目にかかったのは、私が麗澤大学の3年生の時だった。当時私は暇さえあれば、中国語学科の共同研究室に出入りしていた。教室番号は203、通称203高地、そこに行けば授業では聞けない様々な知識に接することが出来る。先生方の湯茶のお世話をしながら、辞書の使い方や文学の話題を貪るように耳に留めてはノートに記していた。1年生の時、「パキン」と聞いて「フランス人ですか」と尋ね、奥平定世先生に大笑いされ、部屋に帰って中国文学史を猛勉強したのも今では懐かしい。

2年生の時、輿水先生が非常勤で来られ、趙樹理の小説の読解授業を受け、そのアカデミックな読み方に感激し、東京外語の大学院受験を決意した。その翌年、金丸先生も非常勤で来校された。私は残念ながら授業が無かったのだが、偶然にも、母校都立戸山高校の先輩であることを知り、親近感を覚えた。先生は、初めて私に会った時の事を、「学生服姿で大きなズックを持ち、中からトイレトペーパーを取り出して鼻をかんでいた学生として非常に印象に残った」と杯を片手に述懐されていたことがある。

先生の温顔に惹きつけられた私は、ちょうどその頃、清水元助先生の『児女英雄伝』の授業があり、その難しさに閉口していたので、厚かましくも先生に「冬休みに『児女英雄伝』講読をしていただけませんか」とお願いした。すると先生が「『水滸伝』ならやってもいい」とおっしゃたので、二つ返事をお願いすることにした。

3年生の冬休み、箱根で合宿を行い、参加者は私と秦さん（のち、長崎国際大学教授）、立松さん（現拓殖大学教授）、石原さん（現、私の妻）、

前田さんの五人の麗澤大学生だった。合宿は3日間丸一日中テキストを読むというハードなものだったが、その充実感は何物にも代えがたく、その後、年々開催され、東京外国語大学の学生も続々と加わるようになり、内容もいつしか元曲を読む“読曲会”へと変わり、今の俗文学研究会へと発展した。現在は当時の合宿仲間だった川島先生（現東京外国語大学教授）が主宰されている。この会から巣立った大学教員はあまりに多く、とてもここでは紹介しきれないが、それぞれが一家を為し、各分野での研究教育に活躍していることから、最晩年まで若い世代の育成に心血を注がれた金丸先生の類まれなご人格とその感化力が窺い知れるのである。

その後“読曲会”での読み合わせの成果が研究会報として継続して出版され、日本における元曲研究の一翼を担ったことは記憶されてよい。

誰にでも暖かく接し、決して敵を作らず、常に周囲の人材に手を差し伸べ、理解し、励ます先生は大学行政においても多くの人々に信頼され、東京外国語大学の発展に大きく貢献された。この点については、昨秋の偲ぶ会で輿水先生が詳しく紹介されている。

先生の訶咳に接した我々門弟が先生を語る時、まず披露することといえば、お酒だろう。先生は無類のお酒好きで、ゼミの後、研究会の後には必ず酒盛りとなった。大塚の江戸一のあさりの酒蒸しが好物で、うまそうにその汁を吸うお姿が今でも目に浮かぶ。二次会、三次会はざらで、終電車も無くなり、当時東久留米にあったご自宅にみんなでタクシーで乗り付け、朝まで雑魚寝したこともあった。

先生の酒席は話題がその日勉強したことの再吟味や中国に関する様々な話題で、じつにためになる。かといって、いささかも堅苦しさはなく、誰の意見にも耳を傾け、対等に論じて下さる。それゆえ、みんな遅くまで帰ろうとしなかった。

毎夏の合宿も、あさの9時から夜の10時まで読み続け、それでおしまいかと思いきや、それから杯を手に明け方の3時4時まで談論風発、そのうち、一人寝込み二人寝こみして、先生も大往生、それでも朝になるとまた読み始める、といったものだった。

今では元曲研究の大家となった関西大学教授の井上泰山君がいつも先生

に食い下がっていた姿を思い出す。先生の介添え役といっても良い立場を貫かれたのが、既に退官された小林二男元東京外国語大学教授で、昨秋の偲ぶ会も氏のお力によるところが極めて大きい。

当の私とはいうと、誠に不肖の弟子で、途中から専門分野の宗旨替えをし、更に学校行政にかまけて、読曲会もいつしかご無沙汰してしまった。本来なら破門されてもおかしくなかったのだが、その後も変わらずお声を頂けを頂き、更に定年後は無理なお願いにもかかわらず、麗澤大学教授として教鞭をとって頂いた。正真正銘「海の如く深い」師恩を思う時、思わず滂沱と流れる涙を禁じ得ない。

「三瀦君、君は武断派だね」、大学院に入ったころ、先生からかけられたこの言葉を私は座右の銘にしている。学問の結果は一刀両断に結果を急いではいけない。真理は一つとは限らない。躊躇い、逡巡し、資料を涉猟、推敲を重ね、それでもなお結論を疑う、その用心が無ければ学問ではない。すぐ「こうに決まっています」といってしまうせつかな私の弱点を先生は「武断派」と遠回しに指摘された。爾来 40 数年が過ぎたが、以後この言葉を忘れることは決してなかった。

ご逝去の半年ほど前、御自宅にお見舞いに行ったときお目にかかったのが最後になってしまったが、今はただただご冥福を祈るばかりである。今頃は泰山の冥府君とともに六朝志怪を肴に愉快に酒を酌み交わしているらっしゃるかもしれない。いつか陪席させて頂く日を楽しみにしていよう。